

動作分析によるジャケットの着心地評価

○神内良子 佐藤眞知子 渡部旬子

(文化女大)

衣服の着心地を左右する要因は、素材、ゆとり量、衣服圧、デザインなど多くあるため、着心地の良し悪しの感じ方や言葉での表現の仕方も様々になる。現状では衣服を着用した時の評価で最も有効とされているのは、人間の五感による官能評価法、つまり着用感による評価と言われている。しかし、その官能評価法も基準化されてなく、着心地を表現する言葉も的確性に欠けるきらいがあったように思われる。そこで着心地内容を整理し、評価するチェックリストを作ることを目的とした。

研究方法は、本学女子学生を対象にサイズの異なるジャケット3着を用い、着脱の様子、着心地確認動作等についてビデオ撮影と着用官能検査を行ない着心地の評価要因を探った。

結果、サイズの適合に関する設問では、バストサイズに対応したものが良いとされ、鏡を見ながら襟元を整えたり、ウエスト付近を触ったりのような行動がみられた。運動適応に関する設問では、1サイズ大きいものが良いとされ前挙動作、両肘組等の行動がみられた。着脱動作は各々3タイプに分類でき、タイプ別に着脱所要時間に有意な差がみられた。また、着心地の良いものについての評価用語は包括的な表現が多かったのに対し、悪いものについては特定した表現をしており、着心地確認のための時間も動作数も共に多くかかっていた。これらのことをふまえて、ジャケットの着心地評価のためのチェックリストを作成した。